

C-06-4

遷延性意識障害患者の「皮膚損傷」の第2報 筋緊張タイプと上肢の特徴

自動車事故対策機構千葉療護センター

○小嶋昌子, 河野奈央美, 小塚智昌, 佐藤弘子, 吉沢純子

【目的】昨年度当センターにおける遷延性意識障害患者の皮膚損傷について報告した。皮膚損傷の原因としてこのような患者に特有な姿勢や体位を4つに分類して現状分析した。今年度はさらになぜこのような患者に皮膚損傷ができるのかを姿勢・体重・つめなどについて検討した。【方法】対象は、2006年度1年間の当センター入院中の重症頭部外傷後遷延性意識障害患者80名のうち報告件数の多かった筋緊張タイプの31名を中心に皮膚損傷数と身長、体重、上肢の特徴について検討した。【結果】31名の皮膚損傷数は276件であった。分類してみると上位8名で151件（全体の54%）であったので下位8名との比較を検討した。皮膚損傷数の多かった上位8名は上肢がやや弛緩気味の伸展タイプであった。又下位8名に比較して平均身長は変わらなかったが、平均体重は1.2キログラム多かった。また上位8名はコミュニケーションのとれにくい患者であった。爪に関しても肥厚などの特徴があった。【考察】弛緩している上肢は移送や体位変換時、患者自身の爪で身体に対して損傷しやすくなるのではないか。体重の重い身体は動かすための介護者の負担は大きい。しかし患者自身では動くことができず危険回避ができない。したがって看護師は移動手段に対してみなおしや意識をもったかわりが必要ではないか。そして動かすことができない身体であっても本人が少しでも自分で「動くことができた」という意識を持たせることができるようなケア、患者さんにも介護者にも負担が少なくコミュニケーションが自然にできるような看護技術が皮膚損傷の減少に繋がるのではないだろうか。